



万延の砲筒どかと青葉潮
下田港翠巒ばかりぽりかな
断崖は嘴の形や青葉潮
木々の間を回廊にして鳥の恋
栗咲くや我が身に微熱ある如し
滝不変まばたきの間の半世紀
神賑はひすたと静め田水張る
子子に沖行く船の見えざりき
麦熟るる光の房の撫づる度
雪溪を滑り来る風自由とは
あさぼらけ乾草に受け死産の仔
蟻の列天の深さを知らざりき
筑波嶺を遠まなざしに更衣

*

膝突いて五月の土に母を還す

堤 保徳
奥山源丘
塩原英子
田中純子
久保美智子
内田愛子
功刀たかね
丸山公子
平山広子
福田紫枝子
市川敬子
押見南美子
永島理江子

滝澤あや

飯島晴子忌舌平目フライに揚げ
憲法記念日壇蜜のグラビアを
わが甞われに返りぬ朴の花
覗きこむ藍甕の闇夏嵐
完璧は盗みとるべし薔薇の花
青嵐昨日の風を押し退ける
ずる休みしたる心地の梅雨晴間
葛切の一椀兄の忌を修す
青葉寒武器モテ守ルモノハナニ
農継がぬ息子が自慢農具市
新宿はパン屋ばかりやソーダ水
初胡瓜川に流せる習ひかな
人間を捨てよ捨てよと青葉騒
偶然といふ影と影春の道
蕊高く掲ぐ蓺菜エゴイズム
己が殻破る心地よ桐咲けり

金子圭子
満田光生
古畑恒雄
海野恵子
加藤律子
伊東寿充
太田 薫
水野二三夫
高松正明
志田 成
門前光代
小川ふみ
鈴木臣和
田中 薫
曾根原幾子
根橋久子

岳俳句・拓くことば 八月

(444)

宮坂 静生

青葉潮に托して

万延の砲筒どかと青葉潮 堤 保徳

アメリカ海軍提督ペリーが来日し日米和親条約が結ばれたのは、一八五四年。幕末の世はいよいよ騒然となる。万延は一八六〇年三月十八日から翌年二月十九日まで。下田港に据えられた砲筒はその騒然たる世相を端的に見せつけるもの。打ち寄せる青葉潮のうねりも緊迫感を十分に感じさせよう。同じ青葉潮の句をもう一句。

断崖は嘴の形や青葉潮 塩原 英子

断崖が鳥のくちばしの形をしている。断崖絶壁の表現として「嘴の形」は鋭い。石廊崎あたりを捉えたものか。真夏の潮の表現には、山海の構造がきちんと写し出されている。

木々の間を回廊にして鳥の恋 田中 純子

回廊は建物に属する長い廊下。それを木立の間に見たのは寺など樹木の多い処を想定したものか。春先に鳥が自在に恋をする。スケールの大きな一句。チマチマしていない。天平時代の寺院でも目に浮かべるならば、恋にも格調がある。

着想に意外性がある。もとより子子に万象が見えるものとも思われないが「子子」を大海を知らない島国人の象徴とでも解するならば、実にスケールの大きな句になる。伊豆吟行でのペリー来航の事実から触発されたものか、佳句。

麦熟るる光の房の撫づる度 平山 広子

風に波立つ熟れ麦畑の光を思った。「光の房」を捉えることができるのは非凡。麦秋の光をなんとか捉えたいと私も長年思っていた折なので、やられたと同感したのかもしれない。作者はキリスト者らしい。明るく前向き。そんな生き方も滲み出た作。麦秋といういい季節は短い。いかに短い時間を捉えるかに才能があらわれる。

今月の秀句

下田港翠巒ばかりばこりかな 奥山 源丘

伊豆半島へ平成二十八年度の「岳」吟行をした。その折の囁目句。伊豆高原在住の作者だけに、さすがにつばを心得た句。「翠巒」はみどりの山という漢語表現。「ばかりばこり」の擬音を巧みに生かし、硬軟のことばのバランスによるイメージの構成が的確だ。日本列島生成の時期、南方フィリッピンあたりから流れてきて合体した地形を彷彿とさせる。

栗咲くや我が身に微熱ある如し 久保美智子

栗の花特有の体液を思わせるような匂いからの連想か。比較的目につく比喩であるが、栗の花からどろんとしたすぐれない気分を捉えたのは、他の比喩表現よりはふさわしい。暑くなり出す梅雨時は実際体調も快調とはいえないのであるう。

滝不変まばたきの間の半世紀 内田 愛子

作者は以前訪ねたことがある滝に立ったもの。その間五十年が経つ。滝を前にすると、それは須臾の間、まばたきをすくらない短い間に思われる。滝は昔日と変わらないのに、あゝ私は、という嘆息をぐっと抑えた点が気丈な作者らしい。着実に、句が大きくなっている作者に注目している。

神賑はひすんと静め田水張る 功刀たかね

諏訪の御柱行事（騒ぎ）を無事了え、田水張る毎年の農作業に入ったという。「すんと静め」も「神賑はひ」も巧みな表現だ。淡々と大事をこなす農村暮らしのベテランの貫禄が一句から感じられる。作者の特色は日本語の美しさにある。

子子に沖行く船の見えざりき 丸山 公子

雪溪を滑り来る風自由とは 福田紫枝子

「自由とは」がいい。雪溪の見える山頂近い広がりに出た感激を「自由」のことばで捉えたもの。自由の概念にはいろいろの解釈があるうが、これは登山者にして詩人の感性が見出した自由の新見。そこに感心した。

あさばらけ乾草に受け死産の仔 市川 敬子

馬牛などの死産の仔を早朝、乾いた牧草の上に寝せたという。哀れこの上ない光景。牧畜農家にとり、仔の出産こそ待望の時。その落胆ぶりを思うと胸がしめつけられる。「あさばらけ」という古語を用いたのは死への莊嚴の思いからであろう。自然の残酷さをも受け入れていかなければならない現世はなんとも辛いことだ。

蟻の列天の深さを知らざりき 押見南美子

隊列を作り地上を必死に進む蟻。天など考えたこともなかったのではないかと作者はいう。早天の蟻の死などを見て思ったものか。断定的ないい方なので、蟻に関するなにか決定的な事実を見て、表現したものと思うが、地上の蟻に「天の深さ」は意表を突く着想である。

筑波嶺を速まなざしに更衣 永島理江子

筑波嶺の見える常陸の地は作者のふるさと。老いていよい

拓くことは ⑬ 自句寸言③「母よりも」

墓石にリヤカーの柄かけ馬鈴薯掘る 昭和30年

「龍膽」(第七十四号・昭和三十年十月号) 雑詠。昭和三十年八月、木曾上松寝覚の越前屋での富安風生歓迎句会入選句。生活句として些細な点への着眼が褒められた記憶がある。風生先生とは初対面。この後、俳誌「若葉」に入り、「浅瀬汁句ふ朝寝を惜しみけり」が初入選。

掲句を自分では「クソリアリズム」と思い、好きではなかったが、周辺の俳人は好意的に見てくださった。着眼は木曾ではないが、いかにも木曾らしく描いたもの。私の作句は事実四〇％、六〇％は想像。詩想を詠えたいという思いが初めからあった。付記。このときの風生木曾詠「山の秀の残照淡き鰯突く」、善光寺詠「三伏の一天の下御本殿」に惹かれた。季語「三伏」を初めて知り、いつか使いたいと思った。句集『青胡桃』所収。

母よりも重き石のせ冬菜漬く 昭和30年

「龍膽」(第七十五号・昭和三十一年一月号) 雑詠巻頭。同時詠「天が下菊の名にして大黄河」を師は推奨してくれた。松本安原町の豆腐屋さんが俳句好き、菊作り名人。そこでの句会の即吟、高句句であったが、自分では綺麗ごとだと思った。掲句は母ものが多い私の初期の代表作。漬菜時にはよく手伝った。母は手際がよく忽ち洗い上げ、張板に束を並べ水切りをした。四斗樽に漬けるのは私の

役。裏の濡縁の隅にある金つば型の大きな石を載せた。中背の母であったが、働き者で軽かった。夕方、草履履きで中蓋を踏み、さらに菜を追加した。翌朝水が上がっていることを願った。菜は沢山漬けた。母詠では「母慣れし思もて創る初かまど」は実感。「路の馬糞あつめる母と夕焼けて」は嘘。自分をいくぶん悲劇か喜劇の主人公にしたい気分がいつもあった。句集『青胡桃』所収。

銀漢の夜毎なだれて学に倦む 昭和30年

「龍膽」(第七十五号・昭和三十一年一月号) 雑詠。前書「受験勉強のある夜は」とある。学に倦んだことはなかったが、恰好を付けないと句にならなかった。いまだ微妙な表現ができなかった。「寒夜の灯人一人生きる広さ照らす」は実感があつた。貧しい最中で、六軒続きの集合住宅。階下に二間、二階に二間。北向きの二階六畳が勉強部屋で、古い座り机に脚を付け立机にし、抱き込むように向かった。家は旧制松本高等学校へ徒歩で十五分、近辺の下宿生が夜遅くに火種を貰いに来た。母は学生好き。いつか私も松高生に憧れ、その後身の信州大学文理学部に入るのが当然のように思っていた。北信の稲荷山で没落した乾物問屋八百彦を再興したい父であったが、その才覚に乏しく、一家みんなが苦勞した。本当は勉強どころではなかったのである。学に倦むよりも天の川を見上げて涙した。句集『青胡桃』所収。

よ産土恋しの思いがつる。夏の更衣(陰曆四月一日、いまは六月)のときは、女性にとり母が用意してくれた拾への愛着がつよい。「遠まなざし」は思郷の思いの表現だ。次の句も推薦候補に手控えた。

しゃぼん玉吹いて世界を見せにけり 金子 圭子
伊豆七島のひとつとつ曳きゆく燕魚 根橋 久子

壇蜜のグラビアが句材に

飯島晴子忌舌平目フライに掲げ 金子 圭子

原句は「舌平目フライに掲げて飯島晴子忌」。下句に飯島晴子忌を置くと、なぜ晴子忌なのか、上句の表現との関わりがむずかしくなる。こゝは忌日を上句に据えて、強引に忌日と下句のことがらとの関わりを掘り伏せるいい方以外にないのではないか。深く考えれば、飯島晴子にはどこか残酷なことをさりげなくやり通す一面があつた。同じ晴子忌の句、螢火忌の次の句も推薦候補にあげた。

螢火忌のほたる袋をかなしめり 横地 妙子
憲法記念日壇蜜のグラビアを 満田 光生

憲法が壇蜜の裸のグラビアも表現の自由の一つとして認めている。この憲法により壇蜜派の老若も護られていることを知れというのである。表現の自由を叫ぶのに現代の初老のオ

ジサマ族に愛されている裸の壇蜜を正面から取り上げたのがおもしろい。下句は「も」ではなく「を」が効く。

わが弔われに返りぬ朴の花 古畑 恒雄

当然のことのようでありながら「わが」と「われ」の違いの工夫に注目したい。声こそいのち。わが一声一声をしっかりと検証し、われが受け留めている誠実さ。朴の花の気品も一句を品格ある句にしている。

覗きこむ藍壁の間夏風 海野 恵子

「夏風」との取り合わせが一句を大きな句にしている。藍を詠い、藍のいのちの最盛期の夏をしっかりと掌中に収めている。情を詠いながら、自然のもののかたちを着実に自分のものにしつつある作者の成長がよくわかる。努力家だ。

完璧は盗みとるべし薔薇の花 加藤 律子

どこから「盗みとる」のか。自然からだ。ひとの表現から大いにまなぶのも「盗みとる」であるが、究極の「完璧」は自然にある。薔薇をもってきた志のスケールの大きさに共感した。人力で及ばない深奥は、それとなく盗む以外にない。意欲的な新進に注目している。

青嵐昨日の風を押し退ける 伊東 寿充

四十二歳の作者らしい体当りの力強さを風に托した。梅雨

のさなかの黒南風を押し退ける梅雨明けの青嵐、白南風を配した。新しい風が古い風を押し退ける。自然の世界は、きびしい闘いだ。隙がない。その迫力によって織物の目のように結んだ完璧な自然のスペクタクル(豪華なシーン)が出来上がる。巧い句だ。

ずる休みしたる心地の梅雨晴間 太田 薫

梅雨の晴間はうれしい。完全に真夏の日射してはないが、ほっとした心地よさがある。「ずる休み」という生徒のようないういしい気持の比喩を用いた作者は先生。淡いユーモアがあり、生徒の気持をよく捉える先生像が浮ぶ。

葛切の一碗兄の忌を修す 水野二三夫

忘れかけようとしている兄の忌か。一碗の葛切を食べ、兄の命日をしのんだという。もうだれも兄のことを思い出す人もいなくなったのか。去る者は日々に疎しという。現世は生者の世だけに、死者は次々と忘れ去られる。その中で作者の律義さが快い。兄が好きであった葛切を供えたやさしさ。

青葉塞武器モテ守ルモノハナニ 高松 正明

片仮名書きに迫力がある。武器をもって殺し合いの戦場に出て、なにを守るのか。わが同胞のいのちを守っても、先方の敵のいのちはどう考えるのか。いのちに違いがあるのか。尊いいのちと蔑むいのち。いのちに違いはない。武器をもっ

人間を捨てよ捨てよと青葉騒 鈴木 臣和

簡単に人間稼業を捨てることはできないが、夏の青葉騒をそんな風に聴く。作者の目指すスケールは青山ほど大きい。生き方は心掛け次第。チマチマした人間の生き方に、おだやかに合口をつきつける一句とみる。

偶然といふ影と影春の道 田中 薫

原句「影と影との」とある。「影と影」の下に切れを入れる。一句に切る意識を持つことが句を大きくする。「莊子」の影と罔両(影のふちに生じる薄い影)との対話ではないが、人間の出会いも影と影との偶然の出会いのようだ。春の道が

今月の秀句

膝突いて五月の土に母を還す 滝澤 あや

母の骨箱(骨壺)の骨を土にもどしたのか。「膝突いて」とは穴の深さを暗示する。両膝を土に突き、屈んで作業をしたさまを、母だけにこと細かに描写したのである。晴れやかな五月が忘れることのできない哀しい月になった。一字の字余りの下句にしっかりした落ちつきが感じられる。土から生まれ土に還る。作者のほっとした安堵感が出ている。

て守るべきものなどないのではないかというのであろう。自衛隊戦場派遣のきびしい現実には直面しているときだけに、注目句。

農耕がぬ息子子が自慢農具市 志田 成

頭がいい息子は家を出て都会暮らし、親の農業の後継者になどならない。「お宅の倅はいまどうしてる」「大学進学以来、大都会へ出て、帰って来ないよ」。こんな会話を春先の農具市で交わす。農村へ帰って来ない息子を「自慢」がいい。親の矜持半分、あきらめ半分。太々とした句になっている。

新宿はパン屋ばかりやソーダ水 門前 光代

名高い中村屋を皮切りに新宿にはパン屋が多いと感じる。パン屋の店先でソーダ水を呑みながらの寸感か。このような直感が俳句誕生のもと。くわしいリサーチなどしたわけではない。直感が大切。思いときには理屈を超えたおもしろさがある。

初胡瓜川に流せる習ひかな 小川 ふみ

作者の住む富山県砺波地域はいろいろの伝承が生きている。はじめて生った胡瓜は小さいうちに採り、川へ流す。川の神さま河童への供物というのか。おもしろい。私もことは初胡瓜を仏壇に供えたが、これは平凡。自然とともに暮す川への供物がいい。作者九十歳にしていよいよ作句力旺盛。

明るい。人間が誕生したばかりの原始の世界を思わせる。

蕊高く掲ぐ蕺菜エゴイズム 曾根原幾子

雪嶺集に「蕺菜の冷え及びくる拓地かな」がある。同じくくだみ詠であるが、掲句の「エゴイズム」がおもしろい。庭の他の草を圧倒し、繁殖力がすさまじい。擬人化表現であるが自分勝手な草といえよう。

己が殻破る心地よ桐咲けり 根橋 久子

桐の花を仰ぎ、その嵩高さを「己が殻破る心地」とは珍しい見方。主人公の感受性ゆたかなさまが伝わる。求める思いがあったからこそ、旧年の花殻を押し退けるように咲く桐から自分の脱皮する思いへの転化ができたもの。

岳集推薦候補に次の作もメモをした。

天へ天へゆりの木の花姉逝きぬ	小宮山 秀子
先々代の長き顎鬚桐の花	白川 紀子
嬰兒のしやつくりふいに立夏かな	丸山 公子
老ゆる身に心そはざる麦の秋	水原 初子
赤き銅敷の如しややまかがし	竹内 八千代
蜘蛛糸を吐くぼんやりとせし不安	吉池 節子
この夏もこの窓に星ばかり見て	堀内 昭代
枯草の下より緑押し上げ来	宮坂 千恵
咲き盛る紫陽花どこかアナーキー	辰野 利彦